

オルタナティブ

人間論

文◎田坂広志  
text = Hiroshi TASAKA

2

## 人類の知 第二の成熟 「言語の知」から「暗黙の知」へ

21世紀、人類の知の在り方は、どのような成熟を遂げていくのか。そのことを「人類の知 七つの成熟」として語っていこう。

まず、第一の成熟は、「言語の知」から「暗黙の知」への成熟。

「言語の知」とは、「言葉で表せる知識」のことであり、書物やネットを通じて学ぶことができる。これに対して、「暗黙の知」とは、「言葉で表せない智慧」のことであり、体験や人間を通じてしか学ぶことができない。

この「暗黙知」(tacit knowing)という概念は、マイケル・ポランニーが、その著書『暗黙知の次元』で語った概念でもあるが、「我々は、語ることができより、多くのことを知ることができ」というメッセージとともに広く知られている。

では、なぜ、これからの時代、「言語の知」から「暗黙の知」への成熟が起こるのか。

それは、これからの高度情報通信革命の時代には、「言葉で表せる知識」は、ネットや情報技術を通じて誰でも容易に手に入れることができるようになるからである。

かつては、「物知り」「博識」「博覧強記」といった言葉は人間の優秀さを表現する言葉であったが、こうした言葉は死語になりつつある。

なぜなら、現代においては、何か分からない知識があれば、すぐに携帯電話やパソコンを使って検索サイトにアクセスし、瞬時に手に入れることができるからであり、ポケットの中の小さな電子辞書には、何十冊もの事典が入っており、簡単に知識を引き出すことができるからである。

そして、こうした情報革命の結果、「言葉で表せる知識」(言語の知)は相対的な価値を失い、体験や人間を通じてしか掴めない「言葉で表せない智慧」(暗黙の知)が、貴重な価値を持つようになっていく。

では、こうした「言語の知」から「暗黙の知」への成熟が起こる時代、我々は、いかにして、その「暗黙の知」を身につけていけばよいのか。

もとより、「体験」を積み、「人間」から学ぶことは重要な方法であるが、その前に、我々が必ず身につけなければならない習慣がある。

それは、「いま、自分が語っていることが、単に書物で読んだ『知識』なのか、体験を通じて掴んだ『智慧』なのか」を、常に省みる習慣である。なぜなら、ネットやITを使って膨大な「知識」が容易に手に入る時代には、我々がしばしば陥る落とし穴があるからである。

「書物やネットで知識を学んだだけで、智慧を掴んだと思ひ込むこと」それは、「現代の病」とでも呼ぶべきものであり、我々の誰もが無意識に罹っている病である。

その病に気がついたとき、そこから、我々の「知の成熟」が始まる。

たさか・ひろし◎81年、東京大学大学院修了。工学博士。87年、米国パテル記念研究所客員研究員。90年、日本総合研究所の設立に参画。取締役・創発戦略センター所長等を歴任。00年、多摩大学大学院教授に就任。同年シンクタンク・ソフィアバンクを設立。03年、社会起業家フォーラムを設立。08年、世界経済フォーラム(ダボス会議)のGlobal Agenda Councilのメンバーに就任。著書に「目に見えない資本主義」「未来を予見する5つの法則」など60冊余。